

脱亜論

時事新報・明治18年3月16日社説

脱亜論

時事新報・明治18年3月16日社説

目次

[脱亜論 【1】](#)

[脱亜論 【2】](#)

[脱亜論 【3】](#)

[脱亜論 【4】](#)

[原文について](#)

[脱亜論原文](#)

[脱亜論の作者について](#)

[脱亜論を取り巻く環境 明治～平成](#)

[興亜論のアンチテーゼとしての脱亜論](#)

[福沢諭吉の朝鮮に対する貢献](#)

[脱亜論の本質](#)

[表紙](#)

[扉](#)

[目次](#)

[本文](#)

脱亜論 【 1 】

世界的な交通網の発達により西洋文明は東に波及し続け、今では全ての地域がこの影響を受けている。

かつては鈍重であった彼らの活動ペースが現代では活発なのは、彼らが交通インフラを使いこなす上に勢いに乗っているであって、西洋人の資質が古来に比べて著しく向上した訳ではない。

故に、我々日本人が覚悟を決めてこれに立ち向かえば十分に彼らを防ぎ得るとの考え方を採るのも構わないだろう。だが、世界の現状を知り精神論のみでの抗戦が不可能と知ってしまった者は、彼ら西洋人と共に文明の海に共に漂い苦楽を共にせざるを得ないのである。

文明とは麻疹(はしか)の様な物である。

考えてもみて欲しい。

長崎で流行している麻疹が東京に伝染しようとしている時に、これを防ぐ手段はあるだろうか？

「そんな手段はない」、と私は断言する。

害悪しかもたらさない疫病ですらこの有様である。

利害半ばし、どちらかと言えば利益の方が大きい文明の伝播は防ぐ事が更に困難である。

これを防ぐのではなく、寧ろ普及に努め国民の適応を促す事が智者の課題である。

脱亜論 【 2 】

近代西洋文明が日本に入ったのは、嘉永の開国(ペリー来航に絡む一連の騒動)を発端とする。

日本人は徐々に西洋文明採用の必然性に気付き始めたが、

当時は進歩の道の障害物としての江戸幕府存在しており、幕府が存在する限りは近代文明の受容とそれに伴う最適化は不可能であった。

何故ならば、西洋文明と幕府政体は相反する存在であり、

西洋文明に合わせて社会の変革を行えば幕府は滅亡してしまうからであった。

かと言って、西洋文明の侵入を拒み続けていれば日本国は独立を維持出来ていなかったであろう。

世界情勢の変化は急速この上なく、東洋の孤島の眠りを許すものでは無かったからである。

ここに、日本人は国家は幕府政体よりも重いと云う大義に基づき、神聖なる錦旗の下に幕府政体を打倒し、新政府を樹立した。

これは単に官民の別なく国中に西洋近代文明を導入しただけの話ではない。

我々日本人がアジア全域において新機軸として、「脱亜」の2字のみで説明し得る主義を確立した事に他ならない。

脱亜論 【3】

日本は国土こそアジア地域の最東端に位置しているが、国民の精神は中華思想に基づくアジア地域の陋習を脱し、西洋的な国際感覚に移行している。

しかし不幸な事に日本の近隣には二つの国が存在している。
一つを支那と云い、一つを朝鮮と云う。

この二国の人民も古来からアジア的な政体・慣習の中で生きて来た事は日本と何ら変わらない。
だが教育の違いなのか人種的な差異なのか、両国は日本人との精神的な隔たりがあまりにも大きいのである。
支那・朝鮮の者達は、自分自身についても自分達の国家に関しても改新すると云う発想が無い。

これだけ交通が発達した世界で西洋文明を見聞きしない筈もないのだが、その見聞が心を動かさないのか、旧来の慣習に固執する様は千年前と変わっていない。

情報が行き交い学問が進歩し続ける現代にあっても、教育を論ずれば儒教しか語れず、
「仁義礼智のみを学校で教えよ」と言いながらも儒教の本質すら知らず、外面だけを取り繕っている。
そればかりか、説いている筈の道德すら失われ、実態は残酷不廉恥であり、常に傲然として自らを省みる事がない。

私が見た所、文明国が東進を続ける国際情勢の中でこの二国の独立の維持は不可能である。
運よく彼らの中に志士が現れ、我々が行った明治維新の様な一大改革を企て、国家と人心の近代化を成し遂げる事が出来れば話は違ってくるが・・・
それが起きない限り、今から数年で彼らの国は滅び、彼らの国土は必ず世界の文明国に分割されるだろう。

何故ならば、支那・朝鮮は文明伝播の摂理に背き、強引にこれを避けようとして元来の因習に閉じ籠っているからである。
例えるなら、病原菌を防ぐ為に空気全てを遮断して窒息している状態である。

脱亜論 【４】

「唇齒輔車(しんしほしゃ)」とは助け合う隣国同士を喩えた言葉であるが、現在の支那朝鮮は僅かな助けにすらならない。

それどころか西洋の文明諸国から見れば、三国の地理・習俗に近い為に日本が支那朝鮮と同一視されてしまう危険を孕んでいる。

掘り下げて説明する。

例えば、支那朝鮮が法律の行き届かない古風な専制政体であれば、西洋の人間は日本もまた無法律の国ではないかと疑念を抱く。

例えば、支那朝鮮が近代科学を解さず儒教一辺倒であれば、西洋の学者は日本も陰陽五行の科学水準だと判断するだろう。

支那人が恥知らずの卑怯者であれば、日本人も同程度だと思われるだろう。

朝鮮の残酷な刑罰を見れば、日本も同様に残虐な国かと疑われるだろう。

例を挙げていけば終わりのない話である。

例えるなら、

或る村落の住民が狂人揃いで愚かで無法でしかも残忍無情であったとすれば、

その村落に真人間が住んでいて日々隣人たちを戒めていたとしても、村外の人間からは他の村人と同列に思われると云う事である。

実際問題として外交現場でこのような三国同一視による被害が随所に現れている。

これは日本にとっての一大不幸と言わざるを得ない。

今日の国際情勢を鑑みるに、我が国に支那朝鮮の開明を待つてアジア全体を発展させるだけの猶予は残されていない。

むしろ、この両国との関係を脱して西洋文明諸国と進退を共にするべきである。

支那朝鮮に対してもただ隣国であると言う理由だけで格別の配慮をする必要などない。

西洋人が彼らに接する様に肅々と対応するだけである。

悪友と仲良くする者は悪名を免れない。

私は心からアジア東方の悪友である支那朝鮮との絶交を宣言するものである。

原文について

以上が、時事新報紙上に1885年3月16日に掲載された社説である。

筆者の稚拙な現代語訳では、論説の正確なニュアンスは表現出来ていない筈なので、
旧文の知識の無い方であっても、是非とも次項の原文に目を通して頂きたい。

脱亜論原文

世界交通の道、便にして、西洋文明の風、東に漸し、至る處、草も氣も此風に靡かざるはなし。

蓋し西洋の人物、古今に大に異なるに非ずと雖ども、其舉動の古に遲鈍にして今に活發なるは、唯交通の利器を利用して勢に乗ずるが故のみ。

故に方今当用に國するものゝ為に謀るに、此文明の東漸の勢に激して之を防ぎ了る可きの覺悟あれば則ち可なりと雖ども、苟も世界中の現状を視察して事實に不可ならんを知らん者は、世と推し移りて共に文明の海に浮沈し、共に文明の波を掲げて共に文明の苦樂を與にするの外ある可らざるなり。

文明は猶麻疹の流行の如し。目下東京の麻疹は西國長崎の地方より東漸して、春暖と共に次第に蔓延する者の如し。

此時に當り此流行病の害を惡て此れを防がんとするも、果して其手段ある可きや。

我輩斷じて其術なきを證す。有害一遍の流行病にても尚且其勢には激す可らず。

況や利害相伴ふて常に利益多き文明に於てをや。

當に之を防がざるのみならず、力めて其蔓延を助け、國民をして早く其氣風に浴せしむるは智者の事なる可し。

西洋近時の文明が我日本に入りたるは嘉永の開國を發端として、國民漸く其採る可きを知り、漸次に活發の氣風を催ふしたれども、進歩の道に横はるに古風老大の政府なるものありて、之を如何とす可らず。

政府を保存せん歟、文明は決して入る可らず。

如何となれば近時の文明は日本の舊套と兩立す可らずして、舊套を脱すれば同時に政府も亦廢滅す可ければなり。

然ば則ち文明を防て其侵入を止めん歟、日本國は獨立す可らず。

如何となれば世界文明の喧嘩繁劇は東洋孤島の獨睡を許さざればなり。

是に於てか我日本の士人は國を重しとし政府を輕しとするの大義に基き、又幸に帝室の神聖尊嚴に依頼して、斷じて舊政府を倒して新政府を立て、國中朝野の別なく一切萬事西洋近時の文明を採り、獨り日本の舊套を脱したるのみならず、亞細亞全洲の中に在て新に一機軸を出し、主義とする所は唯脱亜の二字にあるのみなり。

我日本の國土は亞細亞の東邊に在りと雖ども、其國民の精神は既に亞細亞の固陋を脱して西洋の文明に移りたり。

然るに爰に不幸なるは近隣に國あり、一を支那と云い、一を朝鮮と云ふ。

此二國の人民も古來亞細亞流の政教風俗に養はるゝこと、我日本國に異ならずと雖ども、其人種の由來を殊にするか、但しは同様の政教風俗中に居ながらも遺傳教育の旨に同じからざる所のものある歟、日支韓三國三國相對し、支

と韓と相似るの状は支韓の日に於けるよりも近くして、此二國の者共は一身に就き又一國に關してして改進の道を知らず。

交通至便の世の中に文明の事物を聞見せざるに非ざれども耳目の聞見は以て心を動かすに足らずして、其古風舊慣に變々するの情は百千年の古に異ならず、此文明日新の活劇場に教育の事を論ずれば儒教主義と云ひ、學校の教旨は仁義禮智と稱し、一より十に至るまで外見の虚飾のみを事として、其實際に於ては眞理原則の知見なきのみか、道德さえ地を拂ふて殘刻不廉恥を極め、尚傲然として自省の念なき者の如し。

我輩を以て此二國を視れば今の文明東漸の風潮に際し、逆も其獨立を維持するの道ある可らず。

幸にして其の國中に志士の出現して、先づ國事開進の手始めとして、大に其政府を改革すること我維新の如き大舉を企て、先づ政治を改めて共に人心を一新するが如き活動あらば格別なれども、若しも然らざるに於ては、今より數年を出でずして亡國と爲り、其國土は世界文明諸國の分割に歸す可きこと一點の疑あることなし。

如何となれば麻疹に等しき文明開化の流行に遭ひながら、支韓兩國は其傳染の天然に背き、無理に之を避けんとして一室内に閉居し、空氣の流通を絶て窒塞するものなればなり。

輔車唇齒とは隣國相助くるの喩なれども、今の支那朝鮮は我日本のために一毫の援助と爲らざるのみならず、西洋文明人の眼を以てすれば、三國の地利相接するが爲に、時に或は之を同一視し、支韓を評するの價を以て我日本に命ずるの意味なきに非ず。

例へば支那朝鮮の政府が古風の専制にして法律の恃む可きものあらざれば、西洋の人は日本も亦無法律の國かと疑ひ、支那朝鮮の士人が惑溺深くして科學の何ものたるを知らざれば、西洋の學者は日本も亦陰陽五行の國かと思ひ、支那人が卑屈にして恥を知らざれば、日本人の義侠も之がために掩はれ、朝鮮國に人を刑するの慘酷なるあれば、日本人も亦共に無情なると推量せらるゝが如き、是等の事例を計れば、枚舉に遑あらず。

之を喩へば比隣軒を並べたる一村一町内の者共が、愚にして無法にして然も殘忍無情なるときは、稀に其町村内の一家人が正當の人事に注意するも、他の醜に掩はれて湮没するものに異ならず。

其影響の事實に現はれて、間接に我外交上の故障を成すことは實に少々ならず、我日本國の一大不幸と云ふ可し。

左れば、今日の謀を爲すに、我國は隣國の開明を待て共に亞細亞を興すの猶豫ある可らず、寧ろその伍を脱して西洋の文明國と進退を共にし、其支那朝鮮に接するの法も隣國なるが故にとて特別の會釋に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に從て處分す可きのみ。

惡友を親しむ者は共に惡友を免かる可らず。

我は心に於て亞細亞東方の惡友を謝絶するものなり。

脱亜論の作者について

「脱亜論」なる書物は存在しない。

福沢諭吉がそのような名の著作を出版した事実はない。

福沢諭吉が自身の創刊した新聞である「時事新報」紙上に掲載された社説が、

今この後世において「脱亜論」と呼称されている。

ちなみにこの社説に福沢諭吉の署名はない。

1898年に福沢諭吉は自身の全集を発表するが、その中に「脱亜論」は含まれていない。

福沢諭吉は自分の意志で時事新報の記事を全集に組み入れなかった。

福沢諭吉の死後、「福沢全集」は大正版・昭和版の2回が発刊される。

死後の二版を編纂したのが石河幹明(時事新報・主筆)と云う人物であるが、

一般に「脱亜論」と呼称される著作は、関係者の大半が逝去した後に石河幹明が単独で編纂した昭和版

に挿入されたものである。

特に昭和版は、福沢らしからぬ矯激かつ差別的な表現の文章が福沢の論説として掲載されていることから、太平洋戦争後には左翼勢力(即ち日本の学界界)によって反日運動の材料として大いに喧伝された。

そして日本の左翼勢力が反日運動の一環として昭和版に挿入された論説を中韓両国に流布した為に、福沢諭吉は彼らにとっての不倶戴天の敵となった。

福沢諭吉の没後100年。

福沢諭吉を「侵略主義の元凶」として糾弾する安川寿之輔と、安川が批判の論拠とする脱亜論が福沢の著作である事を疑問視する平山洋との間に安川・平山論争が勃発する。

論争の中で平山洋は、左派勢力が批判している「福沢諭吉全集」の「時事新報」掲載の無署名論説でアジア蔑視表現を含むものは、すべて石河が執筆したものであるとの説を発表する。

一連の議論を平山洋はその著作[「福沢諭吉の真実」](#)に纏める。

筆者は、「脱亜論」の著者が福沢か石河かの議論には組しない。

ただ、論文が無記名であり、執筆者に対しての議論が継続している以上は「著者・福沢諭吉」とは記し難かったの
で、「時事新報・明治18年3月16日社説」と表記した。

※安川 寿之輔　名古屋大学名誉教授/不戦兵士・市民の会副代表理事/イラク派兵違憲訴訟の原告
/韓日平和100年市民ネット共同代表

※平山 洋　慶応大学卒業/思想史研究者/静岡県立大学国際関係学部国際言語文化学科助教/武威大学人文学部非常勤講師

脱亜論を取り巻く環境 明治～平成

後世、「脱亜論」と命名された福沢諭吉の明治18年3月16日社説は、当時は大した話題とならなかった。
山手線の目黒駅が開業した日だったからかも知れない。
著作が当時としては既に知識層の共通認識となっていたからかも知れない。
高らかに叫ばれていた興亜論へのアンチテーゼに過ぎないと当時の人間が判断したからかも知れない。

「脱亜論」が話題となるのは、太平洋戦争の敗戦後に日本の史学界の反日運動の材料として「発見」されてから後の事である。
左翼反日運動盛んな1960年代以降の話である。
そして、近年再び「脱亜論」が脚光を浴びる。

インターネットの発達によって太平洋戦争前後の反日勢力のプロパガンダが全て暴かれ、アジア主義者を偽装する反日運動家や中国・韓国・北朝鮮(この3国は特定アジアと呼称される)の悪質な政治宣伝の数々が明るみに出て糾弾される中で、脱亜論は再びクローズアップされているのである。

日清戦争以前に書かれた論説が現代でも通用する事に、現代人は驚き、
著者が福沢諭吉である事が自身の日々の憂憤を正当化する原動力となり、
今まさに、論説の実践を叫ぶ声が日本中に溢れている。

福沢諭吉が現代のこの情勢を見れば哀しむ事は想像に難くない。
100年以上の時間と数多の英霊の尊き犠牲をもってしても、
論説で指摘した東アジア問題の本質が変わっていないからである。
日本人が相貌を歪めて隣国の排斥を訴える姿も先人にとって好ましい筈がない。
だが、我々は我々日本人の存続の為に「脱亜論」を叫んでいるのである。
仮にこの先、脱亜論の著者が福沢諭吉でないと学術的に証明されたとしても、
日本人は福沢諭吉の名に縋り続けるであろう。

筆者もまた支那朝鮮を謝絶する。
福沢諭吉の著に教化されたからではない。
石河幹明の策に乗せられている訳でもない。

かつて幕府の存在が日本国の存続を脅かした為打倒したように、
アジア主義者が現在の日本国の存続を脅かしている為にこれを打倒せざるを得ないからである。
アジア主義者とは、特定アジアと日本の習俗・地理が近いと云うだけの理由で彼らにに諂い、相手の都合のみの協調を日本民族に強いる事を画策する者達である。
そして、通名・帰化制度を悪用し日本国内に潜入中の特定アジア人である。

この者達の魔手から脱せぬ限り日本に未来はない。

興亜論のアンチテーゼとしての脱亜論

興亜論とは明治から太平洋戦争終戦にかけて日本の主流を担った思想である。

「アジア主義」「汎アジア主義」とも呼ばれる。

一般的に興亜論は、支那・朝鮮との対等提携指向を指すものから日本を盟主とした共同体(大東亜共栄圏)の設立を目指すものへと変遷したとされている。

だが、そのどちらの主張にも日本国をこともあろうか他国と合邦させようとの邪悪な魂胆が含まれており、その危険な思想は現代でも「東アジア共同体」と云う形で残っている。

いずれにせよ、興亜論者は「脱亜論」が危惧する所の、日本を中国・朝鮮と国際社会から同一視させる事を画策し続けており、彼らを放置する事は日本の滅亡に直結する。

福沢も当初は興亜論的な行動を取っている。

私財を叩いて数十名の朝鮮人留学生(両班の子弟)を受け入れ、慶応義塾で学問を与えたのだ。

だが、その朝鮮人達は暴行事件や強姦事件を繰り返したあげく、金庫から金を奪うと云う形で福沢の恩に仇で報いている。

無論、福沢諭吉(脱亜論の著者)は人種論で脱亜論を語った訳ではない。

朱子学的退廃に浸かった中朝両国政府に見切りを付けたのである。

(福沢は生涯、政府と人民を峻別し続けている。)

朝鮮人そのものを切らなかつた証拠に、脱亜論発表後も福沢は朝鮮人革命家の金玉均を自邸に匿っている。

若き日の福沢はオランダ語を学習していたが、世界で使用されている言語が英語だと知ると同時にオランダ語を捨てて英語学習を開始している。

福沢諭吉の生涯にはそう云った果斷さが散見される。

興亜論もオランダ語同様に、福沢にとって時代遅れの発想であり。

かつて英語に舵を切ったのと同様に、興亜論からの転身を考えたのではないか？

もしも脱亜論が福沢の著書(或いは福沢の当時の持論を誰かが文章化した)だとすれば、「脱亜」と云う単語は「興亜」からの方向転換を象徴する単語として使用されたと考えるのが自然ではないだろうか？

福沢諭吉の朝鮮に対する貢献

福沢諭吉が朝鮮人留学生を初めて受け入れたのが明治14年である。

脱亜論の発表が明治18年なので、脱亜論の4年前となる。

(留学生第一号は、後に母国で入閣し、甲午改革の担い手の一人となる兪吉濬である。)

朝鮮側の依頼から弟子の井上角五郎をソウルに派遣し、ハングル語を使用した準官報新聞・漢城旬報を発行させる。

(勿論、漢城旬報は朝鮮史上初の新聞である。)

当初、漢城旬報は漢文表記であったが、創刊号に目を通した福沢が在朝の井上にハングルの使用を提案した。

こうして、紆余曲折の果てにハングルと漢字を併用した独自の文体が生まれる。

朝鮮にはハングルを作る活字職人が存在しなかったので、福沢から2名の活字職人が貸与された。

(福沢は8000円もの私財を投じて活字を作った)

また、朝鮮の志士・金玉均を支援し続けたのも福沢であり、金が李朝によって惨殺された金を日本で供養したのも福沢である。

その他にも日本農工の道具類、大工左官、鍛冶の道具や土方のモッコウ、天秤棒等を自費で購入して朝鮮に贈与している。

脱亜論の本質

インターネット上では脱亜論が随分広まり、特定アジアとの接近を画策する反日勢力に対する反対の論拠として使用されている。

福沢諭吉は脱亜論の著者として、日本人からの再評価の対象となっている。

重要な点は、福沢諭吉(或いは脱亜論著者)の偉大さではない。

100年経っても何の進歩も遂げない中国・朝鮮が日本のすぐ隣に存在し、文明的の不進歩と反比例した近代軍備で日本国の平穏を脅かしている点である。

かつて、偉大なる先人達が西洋列強の侵略主義から日本を護ったように、現代を生きる我々は特定アジア(中国・韓国・北朝鮮)の侵略から日本国を護らなくてはならない。

まずは日本人でありながら、特定アジア勢力を引き入れようとする勢力。

そして、不法入国して日本に在住する朝鮮人・中国人。

彼らを根絶しなければ、日本に明日は来ない。

「我日本国の独立を重んじて、畢生の目的、唯国権の一点に在る」

福沢の時事新報の設立時における宣言文である。

我々不肖の子孫も日本国の独立の為に戦わなくてはならない。